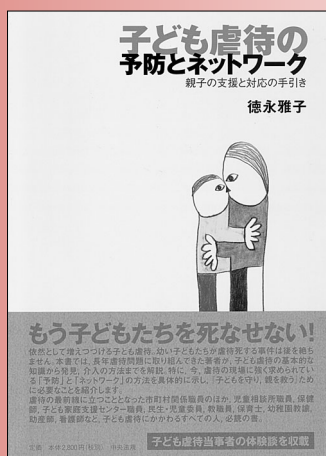


虐待問題に悪戦苦闘する現場の保健師さん必読！

【評者】窪田和子 千葉県千葉市保健福祉局健康部健康企画課

子ども虐待の予防とネットワーク 親子の支援と対応の手引き

徳永雅子(著)



定価 2,940 円 (本体 2,800 円 + 税 5%)
中央法規出版 (Tel.03-3379-3861)

子ども虐待の仕事に関わって 10 年あまり、ネットワークづくりと母親支援を中心にやってきた筆者であるが、少々燃え尽きを感じている最近である。思えば筆者が子ども虐待に取り組み、暗中模索のころに出会ったのが徳永さんの『あなたにもキャッチできる！ 児童虐待 SOS』(新企画出版社)であった。ことあるごとに読み返し、教科書のようにさせていただいた。

そしていま、少々エネルギー不足の筆者を励ましてくれるかのように本書が出版された。読んでまず思ったことは、徳永さんの尽きることのない虐待問題に対する情熱である。淡々とした文章は研修会で話しされる口調そのままに、しかし凜とした力強さに圧倒される。

子ども虐待の基礎知識、予防、気づき、ケアマネジメント、ネットワーク、親支援のグループワーク、虐待する親のタイプと 7 章にわかれ、虐待に関わり始めたばかりの新人でも、中堅でも、ベテランでも、誰がどこから読んでも現場で即、役立つ内容となっている。とくに保健師の行う家庭訪問のもつ意味、虐待予防のための家庭訪問とは何か、そして具体的な訪問のしかたが丁寧に示されており、「家庭訪問が大切！」とお題目のように唱えている筆者にとっては、枠組みを再確認できたと同時に、後輩育成の「虎の巻」になるだろう。

最終章の虐待する親のタイプは、「あっ、あの人はこれだ！」「あのお母さんはこれかもしれない！」と目の前に事例が思い浮かぶ。事例を分類するという意味ではなく、事例を理解すること、そしてどのように援助していったらいいのか、まるでスーパーバイズを受けているかのようなのである。

多くの母子保健の現場で働く保健師は、悩み、迷い、抱えている事例の重さに青息吐息ではないだろうか。虐待は 1 人、1 つの機関だけでは決して解決できない問題であるとわかっていても、ネットワーク会議さえ開くことが難しい現場もあると聞く。しかし本書に投稿された当事者の体験は、私たち保健師に忙しさを理由に逃げてはいけなく、と語りかけているように思う。世界に冠たる母子保健システムをもち、そこに働く保健師であることの誇りと責任を痛感させられる。

最後に、当事者であるユミコさんの「…お母さんは家族より、よその人のほうが大事だったんだよね。家族を慈しむより、よその人にいい顔する方が大事だった…」の言葉は援助職のもつ病理を思わせドキッとした。保健師という援助職を選んだ私自身を見つめさせる本でもある。